

# モモイロ三日月の パス



mikatuki98

「森への入り口は一つではありませんから、押さないで順番に並んで下さい！」

係員の声が聞こえてきたが姿は見えない。わたしは少し不安を覚え辺りを見回すが、係員の声どころか、並んでいるだろう人の姿も誰一人として見えない。ただ、何かしらの気配と目の前に広がる大きな大きな森が私を惹きつけてやまない。

あれは一体いつの頃からか、深夜零時を過ぎると耳元でさわさわと風が吹き、鼻の辺りでふわふわと花の香りがして、早く眠らなくては！ という思いが湧いてくる。しかし深夜2時までどうしてもやらなければならないことがあり、眠る訳にはいかない。わたしは湧いて来る思いをかき消すようにやるべきことに集中した。ところがベッドに向かうと、たちどころにあの大きな大きな森が現れ、無意識に森へ向かって歩いている。

初めて森の入り口に来たときは誰かがいる気配もなく、もちろん係員の声も聞こえなかった。

その代わり一匹のモモイロウサギが待っていた。

「モモたん待ってたぴょん」

「何だ？ ウサギか？」

「モモたんぴょん」

「モモたん？ ぴょん？」

わたしは初め、幻覚でも見ているのかと思った。そもそもわたしにはウサギを可愛いと思う趣味も、モモイロが好きだという感覚も無い。第一わたしは男だ。大人の男だ。こんな夢を見ていること事態赤面ものだ。誰かに知られようものなら、どう言い訳するか頭のフル回転させて考えなければならない。

「モモイロぴょん。あなたも持ってるぴょん」

「わたしも持ってる？」

何がなんだかかわからないままに、わたしはモモたんぴょんと言っている得体の知れないウサギの後をぴょんぴょんと飛び跳ねながら森へ入って行った。そう、何故か普通に歩いているつもりが、ぴょんぴょんと跳ねてしまうのだ。

不思議なことに、森へ入った途端、わたしは早くここへ来ればよかったと後悔した。どうして何十年もの間、ここへ来なかったのだろうとさえ思った。何故そんな気持ちになったのかは、わからない。それどころか、自分の中にもモモイロが存在しているんだと思った。

「モモイロ？ なんだそれ？」

自分の思いにも疑問を抱いた。

「はい！ あなたはコチラの入り口からですよ」

係員が私の右手をひっぱり、三日月型のドアを指差した。わたしはドアを見るなり、どうやって身体を三日月型にしようかと身体をくねらせていると、係員がプププと笑ったので急に恥ずかしくなってしまった。

「では、あなたにはこのモモイロ三日月のパスを渡しましょう。これから森へ入りたい時は左

手でこのパスを胸に当ててください。 いいですか、左手で胸に当てるのですよ！ 右手じゃないですよ！」

「はい！」

わたしはどうして右手じゃないといけないのかとか、どうしてモモイロなんだとか、どうして半月でも満月でもないのかとか、どうして胸に当てるのかとか、パスを持ってくるのを忘れてたら森へは入れないのかとか、色々質問したいことがあったが、素直にはい！ と言ったまま次の言葉が出てこなかった。

わたしはその夜、手渡されたモモイロ三日月のパスを早速左手にもち胸に当て森へ入って行った。

入る前の森はとても大きくきつと迷うだろうと思っていたのに、モモイロ三日月のパスの効果なのか、

突然、泉の前に来ていた。

「この泉は…… そうだ！ 思い出した。 初めてモモイロウサギに連れられて来た場所」

思い出した途端、わたしの身体は泉の中で半分溺れかけていた。

「わわわ…… し・し・沈んで行く…… 深い深い…… 足が届かない…… ウサギー——！」

わたしはウサギの長い耳のように両腕を必死に伸ばし、何故かウサギ！ と叫んでしまった。

するとどうだろう。 泉の底に沈んでしまったのだと思われたわたしの身体は、ふかふかのモモイロウサギに心地よく抱かれていた。

「嗚呼、なんという心地よさ……」

わたしはそのまま自然と目を閉じ、眠ってしまったのだった。

目覚めて残るモモイロウサギのふわふわ感。

「そうだ！！！」

わたしは慌ててモモイロ三日月のパスを探した。

「ない・ない・ない！ あれ～？ 何処へ行ったんだ？ まさかどっかに落として来たのか？

うっそ！ あれが無いと森へ入れないじゃないか。 ちゃんとポケットに…… え？ この服の何処にもポケットなんか無いぞ！ じゃあ、あのパスもらった後、わたしはパスを一体何処に仕舞ったんだっけ？ 何処だ！？ 何処なんだ！ おーい、ウサギー——！ パスは何処なんだよ——！」

わたしは半ばパニックになりながらも思わずウサギ！と叫ぶと、ベッドの上にいるの間にかモモイロウサギが座っていた。

「お！ モモイロウサギじゃないか！ 夢じゃなくても見えるのか！？」

「ハート」

「ハート？」

「ハートぴょん」

「ハートぴょん？ またまたハートぴょんとか分かんないこと言って。 じらさないで教えてくださいよ～」

わたしが困った顔をしていると、モモイロウサギが突然ぴよーんと跳ねた。 かと思ったら、わたしの胸に激突して来た。

「あ！！！！ 痛……くない？」

わたしは咄嗟に両手で胸を押さえたが、激突してきたはずのモモイロウサギはそこには無く、左手の中にモモイロ三日月のパスが残っていた。

「あ、あった！ コレだ……」

その夜から、私は胸に左手を当てて眠ることにした。 不思議なことに、そうすれば夢の中のわたしの左手の中には、いつでもモモイロ三日月のパスが握られるようになった。

「あなたの心がぴよ～ん、いつまでもモモイロを持っている限りぴよ～ん、パスは無くならないぴよ～ん」

何処からともなく、モモイロウサギらしき声がわたしの耳元にさわさわと伝わって来た。 そして鼻の辺りにも、ふわふわした香りが漂って来た。 そしてこの事実はわたしの中だけの、永遠の秘密にしておかなければならないと思った。 了